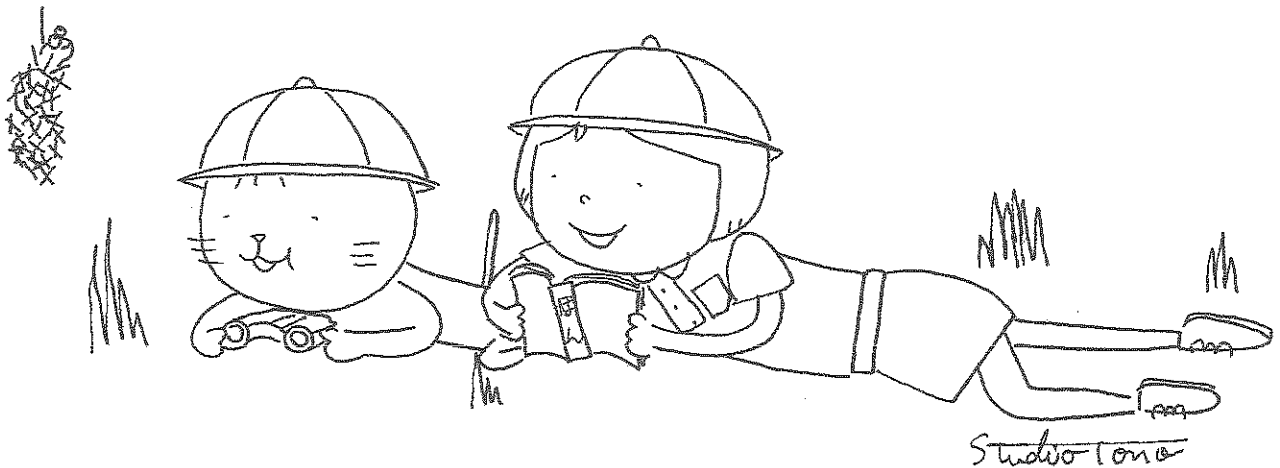
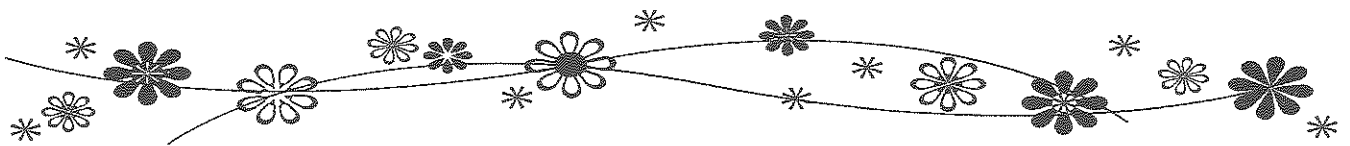


# この本よんだ？

～りいふる BOOK プラス～



## 科学の女性差別とたたかう 脳科学から人類の進化史まで

アンジェラ・サイニー 著 東郷えりか 訳 作品社 2019年 (A:フェミニズム)

「女性の脳に不足している5オンス」。これは本書第4章に付けられた表題である。今から100年程前、「女性の脳の平均的重量は男性のものよりも5オンス(約142グラム)少ない」ことを根拠に「女性の知能がいちじるしく劣等」としてと科学者によって主張されていた。今では、脳の大きさが体の大きさと関連することが立証されており、5オンスの差の説明はついている。「だが、今日ですら科学者は、男女で異なる思考がされている証拠を求めて、脳を探るのをやめたりしない」のだ。

たいていの人は科学は客観的だと思っているだろう。しかし実際は、男性中心主義的な意識を背景に、それを裏付けるような考え方を科学者が求めてきたために、女性差別的な主張が今も存在している。科学ジャーナリストで工学修士の著者アンジェラ・サイニーが、そういった事例を取材し丹念に積み重ねた。

彼女は言う。科学は完璧とはほど遠い。それは手法が間違っているからではなく私たち自身のせいだ。

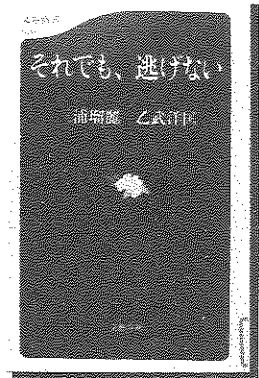
(O.S)



## それでも、逃げない

三浦瑠麗・乙武洋匡 著 文藝春秋 2019年 (O:その他)

本書は、著者のお二人が、対談形式でそれぞれの人生や現代社会の問題について語り合うものです。お二人がそれぞれの人生や考えについて、とても正直に語られている様子に驚きました。そして、批判を浴びながらも社会を変えようと努力されていることに感銘を受けました。特に印象に残ったのは、三浦瑠麗さんの「フェミニンであることと物事をはっきりと言うこと」をあえて切り離して生きることにしたという発言です。聡明な方々の考え方や表現の方法に学ぶところが多くある本です。ぜひ読んでみて下さい。(A.T.)



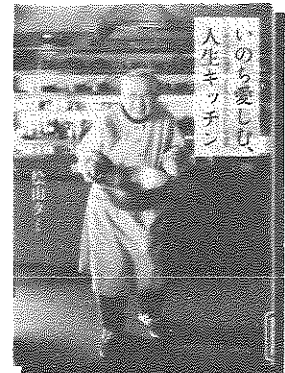
## いのち愛しむ、人生キッチン

絵山タミ 著 文藝春秋 2017年 (K:エッセイ・文学)

著者は95歳の現役料理家、本を手にとったときは、料理本だと思ったが、料理のみならず、長い人生で得た経験や知恵が満載の勇気づけられる本である。1章大らかなれ、2章賢くあれ、3章健やかなれ、4章やさしくあれで、どの章から読みはじめてもいい。「疲れきってしまった日は、料理はきっぱり休み外食にしたっていい」とあり、がんばり過ぎなくてもいいんだと心が穏やかになってくる。巻末には「いのちが喜ぶ愛情レシピ」が掲載されており、参考になる。

舌と心で楽しく味わえる一冊である。

(はんちゃん)



## NHK ターシャからの贈りもの 魔法の時間のつくり方

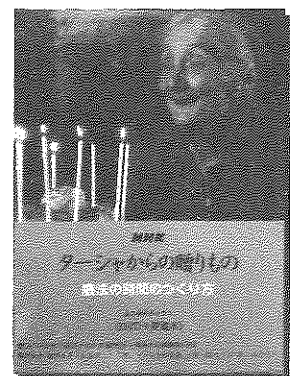
ターシャ・テューダー 述 食野雅子 訳 (DVDボックス+愛蔵本)  
メディアファクトリー 2006年 (K:エッセイ・文学)

ターシャ・テューダー(1915-2008)はアメリカの有名な絵本作家です。子どもの頃から、人形作り、服作り、ガーデニング、動物の世話、お菓子作りなどものづくりが大好きだったので、19世紀の農村生活をしながら、挿絵や絵本を書く生活がしたいと夢見ました。彼女の絵本は子育てや自分の環境や生活の中から生み出された絵です。そのため、彼女の絵本研究ではライフスタイルを紹介する著書も多く、世界中でファンも多くなります。(りいぶるにも数冊あります)

このDVDは晩年の92歳の様子をNHKドキュメンタリーとして映像にしたものです。

実にいそがしいのに、苦とも思わず、楽しんでいる。心の持ち方なのかなと思いました。

(か)



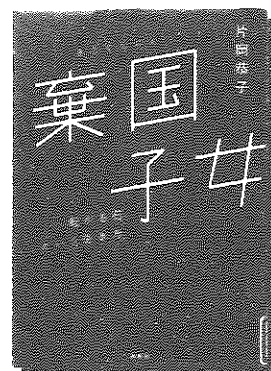
## 棄国子女 - 転がる石という生き方

片岡恭子 著 春秋社 2013年 (K:エッセイ)

作者は、失恋や母親との確執がきっかけで鬱状態になった。生きるか死ぬかというほど追い込まれ、荒療治として中南米に行くことを決意する。2001年から2年4ヶ月に渡り南米大陸を放浪した。13の国と地域を訪れ、2カ国で不法に働いた作者の体験談。日本の常識が通じない旅で知った、ほんとうの“幸せ”とは…

中南米に対して、治安が悪い、貧困などマイナスのイメージを持っていますか？ 日本では想像しなかった“幸せ”という価値観の違い。自分にとっての幸せとは？ 頭が良くて、いい会社に入り、良い給料をもらい、それだけが本当に幸せなのだろうか？ 作者はもがき苦しみ、復活した。中南米を旅し、人との出会いから気づいた生きる視点・魅力をぜひ体感してください。

(めい)



## 境遇

湊かなえ 著 双葉社 2011年 (K:エッセイ・文学)

主人公は36歳のふたりの女性、絵本作家の陽子と、新聞記者の晴見。ふたりは対照的な人生を歩んでいるが、共に生まれてすぐ親に捨てられた過去を持つ親友同士。

ある日、「世間に真実を公表しなければ、息子の命はない」という脅迫状と共に、陽子の5歳になる息子が誘拐された。

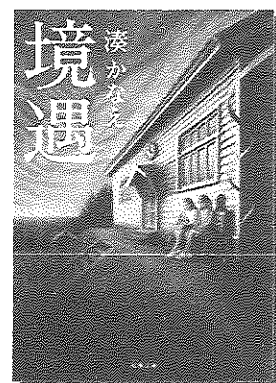
真実とは一体何なのか。

「境遇なんて関係ない。わたしたちは同じ境遇じゃなくても、親友になれてた。」

人は生まれる環境を選べない。しかし、その後の人生は自分の意思で選び、自分の手で築いていくことができる。

このことを忘れがちな僕たちに、そっと手を差し伸べてくれる本だ。

(やっくん)



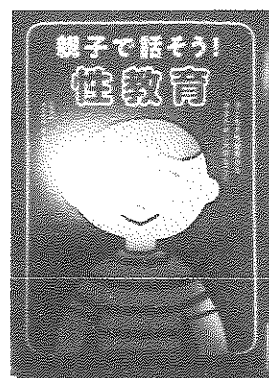
## 親子で話そう！性教育 子どもを性被害から守るために大切なこと

浅井春夫・長香織 監修 朝日新聞出版 2020年 (G:からだ)

「性教育」といわれたら、昔はほとんど学校でされていないだったので、親世代ではうけていないし、恥ずかしいし、何をどうしたらよいのか？よくわからなくて困っている方もいるかもしれない。

今行われている性教育では、思春期の体の成育によりおこる事や見た目だけの男女差だけでなく、もっと広範囲なことを扱っている。昔はなかった SNS のことや性犯罪への知識、自分を大事にするなど、親子でどのようなことをどんな風に扱うかというポイントについて簡単にわかりやすく書いてくれている。参考にしてほしい。

(か)



の

junaida 著 福音館書店 2019年 (J:子育て・絵本)

あれ、この絵本、題がない？表紙を見、背表紙を見かえしてやっとならえた題が「の」だった。え？こんなのありなの？

三つ編み少女の、ぎゅっと目を閉じ、口を大きく開けた横顔、これはどんな気持ちを現わしているのだろうか？町並みや花や動物たちがぎゅうぎゅうづめの立体画のような帽子の縁飾り、これは本文と関わりがあるのだろうかなどと、表紙絵だけでもずいぶん想像力をかきたてられる。

さて題名の「の」は助詞で、「わたしの何々」という時の「の」だ。最初のページは「わたしの」で始まり、そこからはずーと「何々の」が続く。その「何々」は、今見ている絵の中にあるものから次の「何々」が生まれ出ようになっていく。このページのいったい何が(誰が)次の主人公になるのかなと、目を皿のようにして細密に描かれた場面の隅々まで見入ってしまう。

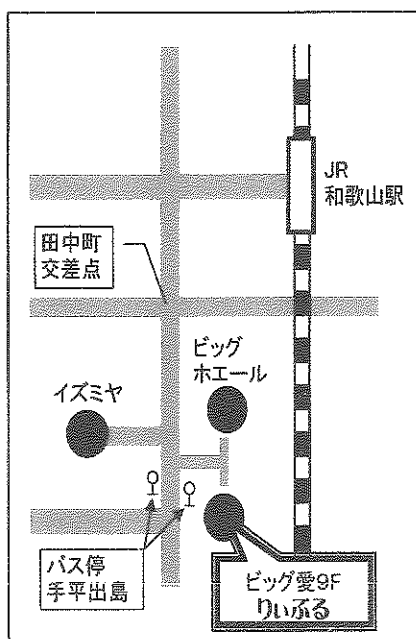
「の」で繋がれているので永遠に続くように思われるが、最後は「わたし」で完結。見事な大団円だ。

大の大人の私がこんなにわくわくさせられるのだから、小さな子供と一緒に読んだりしたらあれやこれやと想像し、楽しく豊かな時間が広がりそうに思えた。 (大空)



※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ  
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他  
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ？ 第23号 (2021年10月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】

今回よりの新しいメンバー、めいさんはりいぶるや本が大好きで、3月の読書会で出会いました。ワーキングホリデーでフランスにいかれたこともあるアクティブな女性でこれからも期待しています。

また、本紙の表紙絵を書いてくれている、Studio Tonoさんの個展が、10月13日から24日まで、和歌山市満屋のギャラリー&カフェAQUAであります。ほのぼのワールドを楽しみませんか？

★あなたも書評を書いてみませんか？ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。 E-mail [libreplus@yahoo.co.jp](mailto:libreplus@yahoo.co.jp)